



## 水稲

### ◆収穫

刈り取り時期の目安は、もみに青みが10〜15%残っている頃である(品種ごとの収穫目安は表1参照)。刈り遅れは胴割れ米の発生や食味、品質の低下を招くので、適期を外さないようにする。

収穫は少し早めの方が米もおいしく品質も良い。特にヒノヒカリは刈り遅れると茶米が増えるので、注意する。

### ◆乾燥

コンバイン収穫の場合は乾燥させずに脱穀をするため、もみを変質しやすい。そのため、脱穀後4時間以内に乾燥機に入れて送風する。バインダー刈りで架け干し乾燥の場合は10日〜2週間程度干すが、あまり長く干しすぎると胴割れ米が発生するので注意する。過乾燥にならないよう、もみ水分15%を目標に乾燥させる。

### ◆種もみの採種

病害虫の多発したほ場では採種しないようにする。特に、近年、内えい褐変病やもみ枯細菌病の発生ほ場が増えているので、

積極的に種子更新を行うようにする。

## 野菜

### さといも(石川早生)

#### ◆種いもの掘り取り期

種いもの掘り取り適期は10月中旬であり、晴天が続く、土壌がよく乾燥している時に掘り上げる。

早掘りは、腐敗が多くなるので避ける。

#### ◆種いも選抜

豊産系の優良な株を選ぶ(子いもは丸型、そろいが良い、肥大が早い、無病のもの)。また、30g以上でできるだけ大きいものを選ぶと良い。

#### ◆貯蔵前処理

乾燥貯蔵は、風通しの良い日陰で15日以上かけて乾燥させる。貯蔵は納屋などの温度変化の少ない場所(5度以下にならない暗所)で貯蔵する。



### たまねぎ

#### ◆育苗管理

育苗中は、苗立枯病や灰色腐敗病等が発生する可能性がある。予防的に表2の薬剤等で防除を行い、健全な苗を育てる。

#### ◆定植

早生品種は10月下旬から定植期に入るが、早植えは収量減につながるため避け、育苗日数が40〜45日前後の苗を植え付ける。ただし、大苗になると抽苔する危険性が高くなるので、葉数3枚で茎の径が4mmくらいの苗を植え付ける。

定植直後にかん水し、乾燥が激しい場合は、うね間に走り水をする。



### キャベツ

#### ◆追肥

初期生育を良くするため、活着後の追肥は早めに施す。

#### ◆病害虫防除

アオムシ、コナガ、ヨトウムシ類の発生が増える時期であり、幼虫は成長すると薬剤が効きにくくなるので、初期防除を徹底

#### ◆収穫

気温が低くなると収穫適期になるまで時間がかかる。そのため、着色だけで収穫適期を判断せず、果実が適度に柔らかくなっていくかどうか確認して収穫する。



### もも

#### ◆病害虫防除

せん孔細菌病の病原菌は感染した新梢の組織内で越冬し、翌年の感染源となる。10月上旬から中旬に、ICボルドー1412(30〜50倍/1〜1)を2週間程度期間を空けて2回散布する。ただし、高温時の散布では、葉害が発生する場合がありますので使用しないこと。

#### ◆元肥の施用

10月下旬から11月中旬が元肥の施用時期で、10a当たりみかん配合を100kg施用する。時期が遅れると地温が低下し、肥料の吸収が悪くなる。さらに元肥の吸収率を高めるため、施用後に十分かん水する。

\*農薬名の後の括弧内は、(希釈倍数/使用時期/総使用回数)を表示しています。

## 果樹

### みかん

#### ◆秋肥の施用

秋肥は着果による養分消費を補い、干ばつなどの影響で低下した樹勢を回復させるために施用する。地温の低下に伴い根の吸収力が低下するため、年内に吸収されるように早生温州では10月下旬に、普通温州では11月上旬に10a当たり燐加安S403を60kg施用する。施用が早すぎると着色が遅れたり、浮皮が増えたりするので注意する。

なお、着果量の少ない園では、施用時期を少し遅くし、施用量を少なめとする。

#### ◆浮皮防止

気温が高く、曇雨天が続くと浮皮が発生しやすくなる。浮皮の軽減対策としてクレフノン(100倍/収穫1カ月前から収穫直前まで/1回)を、果皮が4〜5分着色した頃を目安に散布する。ただし、収穫直前の散布は果実が汚れるので注意する。

#### ◆病害虫防除

果実着色が遅れ、色ぼけの原因となるミカンハダニの防除に、オマイト水和剤(750倍/収穫7日前まで/2回以内)、または、コロマイト水和剤(2000倍/収穫7日前まで/2回以内)のいずれかを、収穫前日数に注意して散布する。

\*オマイト水和剤は、高温時に散布すると葉害が発生する場合があります。高温時には使用しないこと。

\*オマイト水和剤は、みかんのハダニ類で登録がある。

\*コロマイト水和剤は、かんきつのハダニ類で登録がある。

### かんきつ



### こまつな

#### ◆は種

10月中旬に入ったら生育日数が長くなるので1回のは種面積は多めにする。また、低温伸長性の良い品種を選ぶ。

#### ◆病害虫防除

コナガ、ヨトウムシ類の発生が見られる場合は発生初期に表4の薬剤等を散布する。

秋の降雨が連続する時期には白さび病の発生が多くなる。は種量は適正にし、排水を良好にして過湿を避ける。発生初期には表4の薬剤を散布する。



### しゅんぎく

#### ◆病害虫防除

採種当年の種子を使用すると、

#### ◆土壌改良

10月下旬から1月にかけて深さ、直径とも50cm程度の穴を掘り、完熟堆肥と土を混ぜ合わせて埋め戻す。断根を最小限に抑えるため、5年程度かけて樹の周りを一巡するように行う。また、排水不良園では暗渠排水などを整備する。

#### ◆かき

#### ◆秋肥の施用

樹勢回復や来年の花芽充実のため、10月中旬から1月中旬に10a当たり燐加安S403を30〜40kg施用する。

#### ◆病害虫防除

カメムシ類の被害が多い園地では、園内の観察をきめ細かく行い、カメムシ類の発生を見つけたら、スカウトフロアール(1500倍/収穫7日前まで/5回以内)、または、アデオン乳剤(2000〜3000倍/収穫7日前まで/5回以内)を散布する。

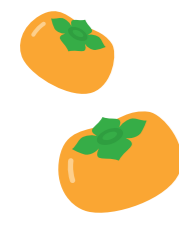


表1.品種別刈り取り適期(目安)

品 種	刈り取り適期(目安)
きむすめ	10月 2日～ 7日
ヒノヒカリ	10月13日～18日
モチミノリ	10月 8日～13日

※6月10日に田植えした標準的な生育の場合。

※一般的に田植えが5日遅れると出穂が2日遅れ、田植えを5日早くすると出穂は2日早くなる。

表2.たまねぎの病害防除に登録がある農薬

薬 剤 名	FRACコード	病 害 名	希 釈 倍 数	使用時期/使用回数	10a当たりの散布液量
オーソサイド水和剤80	M04	苗立枯病	600倍	収穫前日まで/5回以内	100～300ℓ/10a
ベンレート水和剤	1	灰色腐敗病	2000～3000倍	収穫前日まで/6回以内	100～300ℓ/10a

※FRACコードが同一であれば、有効成分が異なっても同一系統の薬剤なので、連用は避けなくてはならない。

表3.キャベツの害虫防除に登録がある農薬

薬 剤 名	IRACコード	害 虫 名	希 釈 倍 数	使用時期/使用回数	10a当たりの散布液量
アフーム乳剤	6	アオムシ、コナガ、ヨトウムシ、 ハイマダラノメイガ、 タマナギンウワバ、 ハスモンヨトウ	1000～2000倍	収穫前日まで/3回以内	100～300ℓ/10a
プレオフロアブル	UN	アオムシ、コナガ、ヨトウムシ、 ウワバ類、オオタバコガ、 ハイマダラノメイガ、 シロイチモジヨトウ	1000倍	収穫7日前まで/2回以内	100～300ℓ/10a
エルサン乳剤	1B	アオムシ、アブラムシ類、 ハイマダラノメイガ、 キスジノミハムシ	1000～2000倍	収穫14日前まで/2回以内	100～300ℓ/10a

※IRACコードが同一であれば、有効成分が異なっても同一系統の薬剤なので、連用は避けなくてはならない。

表4.こまつなの病虫害防除に登録がある農薬

薬 剤 名	RACコード	病虫害名	希 釈 倍 数	使用時期/使用回数	10a当たりの散布液量
カスケード乳剤	I:15	アオムシ、コナガ、 マメハモグリバエ	2000倍	収穫7日前まで/2回以内	100～300ℓ/10a
スピノエース顆粒水和剤	I:5	アオムシ、コナガ、 ヨトウムシ類、 ハイマダラノメイガ	2500～5000倍	収穫14日前まで/2回以内	100～300ℓ/10a
マトリックフロアブル	I:18	ヨトウムシ類	2000倍	収穫14日前まで/3回以内	100～300ℓ/10a
アフーム乳剤	I:6	コナガ	2000倍	収穫3日前まで/2回以内	100～300ℓ/10a
コテツフロアブル	I:13	コナガ	2000倍	収穫3日前まで/1回	100～300ℓ/10a
ランマンフロアブル	F:21	白さび病	2000倍	収穫3日前まで/3回以内	100～300ℓ/10a

※RACコードが同一であれば、有効成分が異なっても同一系統の薬剤なので、連用は避けなくてはならない。

※カスケード乳剤、マトリックフロアブル、ランマンフロアブルは、非結球あぶらな科葉菜類で登録がある。

※スピノエース顆粒水和剤は、非結球あぶらな科葉菜類(みずな、非結球はくさいを除く)で登録がある。

表5.しゅんぎくの病害防除に登録がある農薬

薬 剤 名	FRACコード	病 害 名	希 釈 倍 数	使用時期/使用回数	10a当たりの散布液量
Zボルドー	M01	べと病	500倍	- / -	100～300ℓ/10a
クプロシールド	M01	べと病	1000～2000倍	- / -	100～300ℓ/10a

※FRACコードが同一であれば、有効成分が異なっても同一系統の薬剤なので、連用は避けなくてはならない。

※Zボルドー、クプロシールドは、野菜類で登録がある。